

ポスト・クシャン期バクトリアの土器編年

岩井 俊平

A New Chronology of Pottery in Post-Kushan Period Bactria

Shumpei IWAI

中央アジアの歴史を知るために考古学的な調査が必要不可欠であり、その基礎的な作業として、本稿ではポスト・クシャン期におけるバクトリア地域土器編年の構築を目指した。まずバクトリア地域全体で出土する碗、大型浅鉢、瓶、大甕、アンフォラの5種類を取り上げて型式学的な分類を行い、その出土状況を層位的に検討して変遷を確認する。その結果PK(Post Kushan) I期からIV期までの段階が設定でき、貨幣の一括資料によって各段階の絶対年代も把握可能となる。この土器編年によって、いくつかの遺跡の年代に変更が生じると同時に、政治勢力(特に遊牧民)の交替とは無関係に製陶技術が系統的につながっている様相が明らかになった。

キーワード：バクトリア地域、ポスト・クシャン期、土器編年、遊牧民、オアシス定住民

We need archaeological researches to understand the history of the Bactrian region because there are not enough contemporary historical documents. This is especially true of the study of the pre-Islamic period. This article will establish a new chronology which we can utilize for archaeological research of this region. The post-Kushan period, from the fall of the Kushan dynasty to the invasion of the Moslems, is the era considered in this study. First, I analyze the shapes of pottery that are found throughout the Bactrian region. These include bowls with carinated bodies, large shallow bowls with two handles, oinochoe, pithos, and amphora. I divide each shape into two types by using the typological method. Next, I examine the stratigraphical context of these types and establish the transition. As a result of these analyses, four chronological stages can be identified: PK (Post-Kushan) I, II, III, and IV. Hoard of coins discovered with the pottery make it possible to date each stage. According to my new chronology, the dates of some important archaeological sites must be revised. Furthermore, it seems that the transition point of the pottery are not related at all to political events like nomadic invasions. It is clear that we must reconsider the customary explanation of "destruction by nomads."

Key-words: Bactrian region, Post-Kushan period, chronology of pottery, nomads, sedentary populations in oasis

はじめに

本稿で扱うバクトリア(Bactria)とは、アフガニスタンのヒンドゥー・クシュ山脈を南限とし、ウズベキスタン・タジキスタンのザラフシャン山脈を北限とする、アム川中流域の古名である¹⁾(図1)。紀元前2世紀にグレコ・バクトリア王国が崩壊して以降、クシャンやエフタル、突厥といった遊牧民がオアシス定住民を支配するという体制の国家が形成された。また、いわゆるシルクロードを通して行われた交易でも重要な位置を占めていたと考えられるが、同時代の文献資料が少なく、その歴史理解のためには考古学的な調査が必要不可欠である。しかし、これまでの考古学的調査では、出土状況が判然としない少數の貨幣によって遺跡の年代を決定してしまう場合がしばしばみられ、研

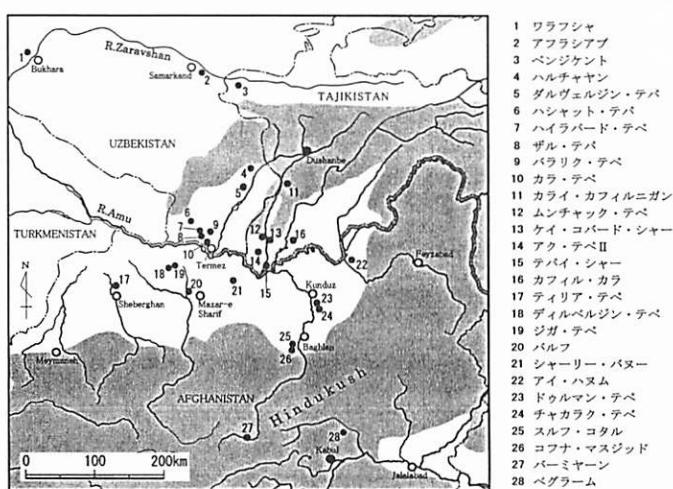


図1 関連地域地図

究者によって遺跡の年代観が異なっている²⁾。本稿の目的は、こうした年代の食い違いを是正するための土器編年枠を構築することである。

從來の土器編年とその問題点

これまでいくつかの遺跡において土器がその出土層位にしたがって報告されている。まず1950年代に、北バクトリアではコバディアーン (Kobadian) 地域の土器編年 (Дьяконов 1953) が、南バクトリアではバルフ (Balkh) 出土土器の編年 (Gardin 1957) が公刊された。この両者は当該地域におけるヘレニズム期以降の編年の基礎として、今なお重要な意味を持っている。その後、クンドゥズ地方ではドゥルマン・テペ (Durman Tepe、水野編 1968) とチャカラク・テペ (Chaqalaq Tepe、樋口・桑山 1970) において出土土器が遺構の床面に準じて層位的に報告され、3~8世紀の土器変遷を示す資料となった。バルフ地方でもソヴィエト隊によってディルベルジン・テペ (Dil'berdzhin Tepe) やジガ・テペ (Zhiga Tepe) が発掘され、一部の土器が建築遺構の変遷に対応して報告されている (Пугаченкова 1984; Пидаев 1984)。ただしこれらは、ひとつの遺跡から出土した土器を対象にした報告であり、バクトリア全体の土器編年を視野に入れたものではなかった。

ほかにも多くの遺跡が発掘され、報告書も刊行されているが、出土土器がどの遺構のどの層から出土したのか、明確に記載されていない場合も多い。いわゆる「人工層位」で区切られた単位ごとに土器が報告され、複数の時期の土器が一時期のものとして報告されてしまう例もある。

また、これまでの研究では土器とともに出土した数枚の貨幣から絶対年代を決定する傾向があった。こうした貨幣は、特に金貨や銀貨の場合、発行された時期よりもはるかに後の時代の層からも出土する場合があり、年代決定に用いる際は注意が必要である。

このように良好な土器資料が少ないということもあって、広く南北バクトリアの土器を比較検討した論文はこれまでほとんどなかった。しかし、1995年からは日本隊によってダルヴェルジン・テペ (Dal'verzin Tepa) のチタデルの調査が行われ、新たに貴重な資料を提供している (田辺・堀他 1997, 1998, 1999, 2000; 田辺・山内他 2001)。他にも北バクトリアの初期中世³⁾の土器を総覧した研究書 (Соловьев 1996) や、フランスのアフガニスタン考古学調査団が1974年から1979年に行った踏査の報告 (Lyonnet 1997) が刊行され、バクトリア全体の考古資料を総合的に判断しようという試みが行われるようになってきた。特にフランス隊の踏査報告は、バクトリアにとどまらずソグドやホラズム、フェルガナなども比較の対象として扱い、出典を挙げながら詳細な土器の検討を行っている労作であ

る。しかし踏査の性格上、表面採集資料が議論の中心となり、層位的な基準が存在しないため、これまでの編年の混乱をそのまま持ち越してしまっている。

研究の方法

こうした問題点を踏まえた上で、本稿では新しい資料を用いながらバクトリア全体の土器編年の構築を試みる。対象とする土器は、この地域全体で出土し、同時にある程度の数量が確保できる器形で、碗、大型浅鉢、瓶、大甕、両把手壺 (アンフォラ) の5種類である。これらは概して精良な胎土で、黄色、赤色に堅く焼成されており、黄白色や赤褐色系統のスリップがかけられている。その特徴的な器形にもかかわらずバクトリア地域全体で共通性が非常に高いことから、専業生産され、広く流通していたと考えて問題ない。バクトリア地域の中では、これら5種類の土器とともに各地域で異なる特徴を持つ壺や鉢、そして煮沸用の甕や鍋が出土し、それぞれの地方でそれぞれの土器組成を形成している。

最初にこれら5種類の器形それぞれに関して型式学的な検討を行い、その変遷を各遺跡における層位的な出土状況によって確認する。先にも触れたように、土器がその出土遺構と対応して報告された遺跡は少ないが、本稿で層位的な分析に用いる遺跡を表1に挙げておく⁴⁾。その上で、出土状況の明らかでない資料と比較して、その位置づけを考えていく。また、土器の変化とは必ずしも一致しない政治的な時期区分名を用いず、単にクシャン朝期以後という意味でポスト・クシャン (Post Kushan、以後はPKと略す) I期、II期といった名称を用いることとする。

この作業によってバクトリア地域全体の土器編年を構築したのち、それぞれの時期の絶対年代について考察する。本稿では、副葬品や埋納などの一括性の高い貨幣資料を使用することで、これと共に土器の年代を決定する方法を探る。

表1 層位による出土状況が検証可能な遺跡一覧

地図番号	遺跡名	層位名 (下層～上層)	文献
5	ダルヴェルジン・テペ チタデル(DTC)	II～I	田辺・堀他 1997; 1998; 1999; 2000 田辺・山内他 2001
5	ダルヴェルジン・テペ 25区(DT25)	II～III	創価大学・ハムザ研究所編 1996
6	ハシャット・テペ	I～IV	Аннаев 1988
9	バラリク・テペ	下層～上層	Альбаум 1960
12～15	コバディアーン地域	IV～VI	Дьяконов 1953 Мандельштам и Певзнер 1958
19	ジガ・テペ	III～I	Пидаев 1984
20	バルフ	II～III	Gardin 1957
23	ドゥルマン・テペ	I～IV	水野編 1968
24	チャカラク・テペ	I～III	樋口・桑山 1970

土器の検討

1. 碗 (図2)

削り出した円形の高台から内湾気味の器壁がゆるやかに立ち上がり、内側に丸く折れ曲がったあと、そこから口縁部が垂直に上に延びる。口縁部の器壁は薄く、内面及び外一面の一部は赤色系統のスリップで覆われている。この碗を形態によってふたつに分類する。

1類：口縁径に比して器高が高く、バクトリア地域に古くからみられる。口縁部外面に暗文が施される場合がある。図2-2が1類の典型である。

2類：口縁径に比して器高が低い。口縁部内外面、及び胴部内面に暗文が施される場合がある。図2-8が2類の典型である。

碗の口縁部高と口縁半径の比率、及び器高と口縁半径の比率を計算し、1類の口縁部高が徐々に低くなるのにともない、口縁径が増大することによって2類が成立することによる型式学的な変化を最初に指摘したのはT.フィッチモン

ズである (Fitzsimmons 1994: 41-43)。また、こうした形態の低平化とともにあって胴部内面への装飾が指向されるようになるために、1類にはなかった胴部内面の暗文が2類になって盛んに行われるようになる。南バクトリアでは、バルフ地方のジガ・テペでこの1類と2類が層位的に出土している。ジガ・テペの1976年の発掘では、図2で示したように、ジガIIIからは1、2のような口縁部が長い1類ばかりが出土し、ジガII、ジガIからは3~5のような、口縁部が短い2類が出土する⁵⁾ (Пидаев 1984: 120)。したがって、碗1類と2類の違いが時期差であると確認できる。

次にクンドゥズ地方の様相を確認する。まず図2-6はドゥルマンIII出土の1類で、暗文は施されていない。ドゥルマン・テペではこのような1類のみが出土し、2類が確認されていない。一方、ドゥルマン・テペから直線距離で約2km南にあるチャカラク・テペではすべての層位で2類が出土しているが、1類はまったく出土しない。図2-10、11はチャカラクIIIの出土で、少なくともこの時期までは

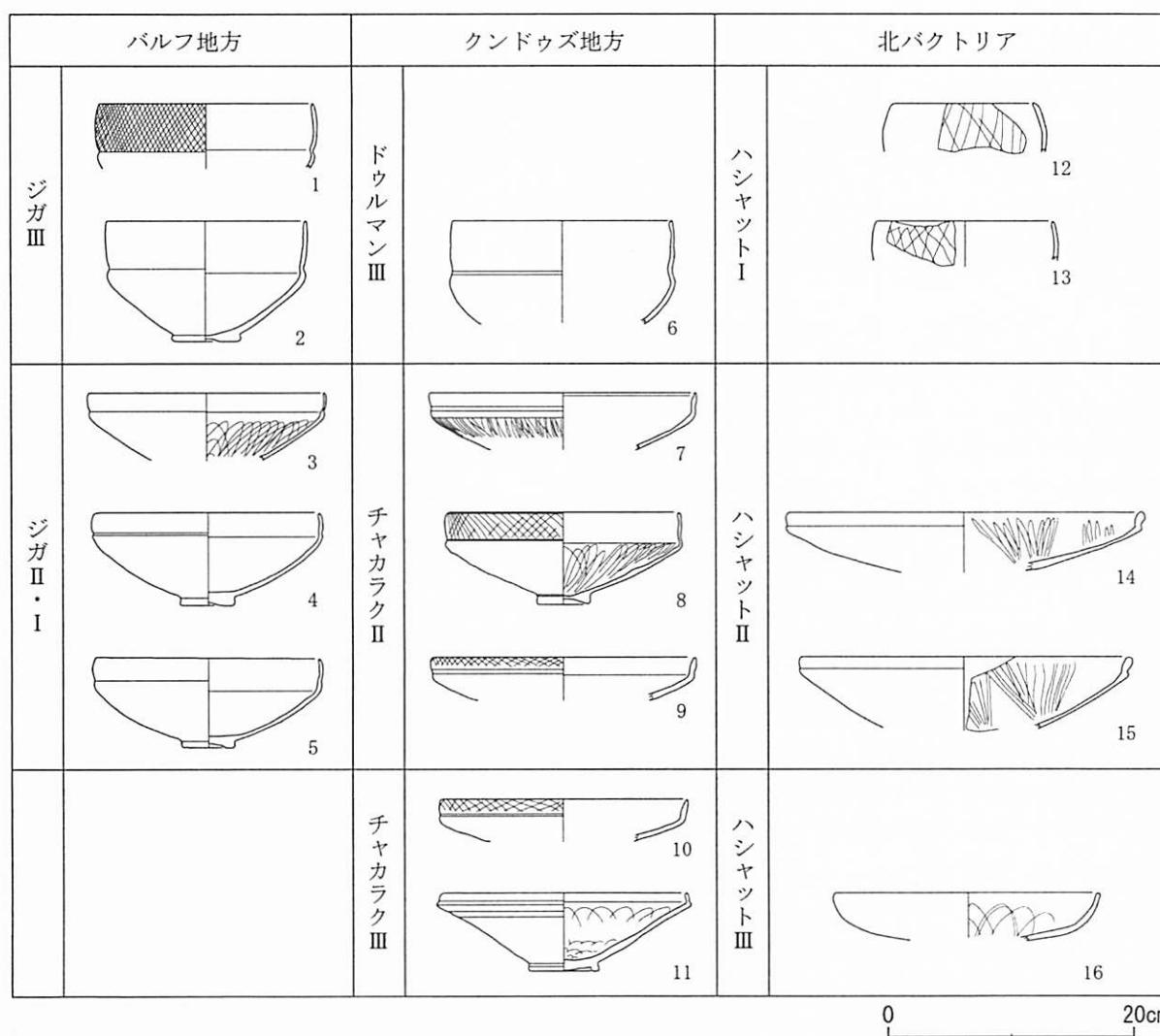


図2 碗の変遷

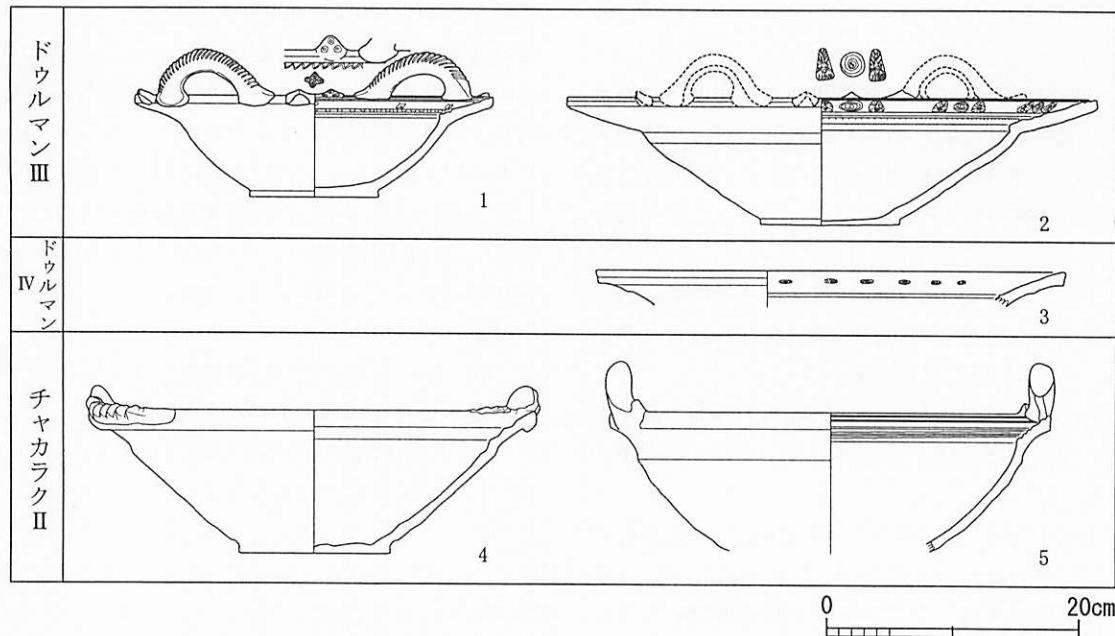


図3 クンドゥズ地方における大型浅鉢の変遷

暗文による装飾が継続している。ただし11の暗文はかなり省略されている。1類から2類への变化は、ジガ・テペの例から時期差であるといえるので、クンドゥズ地方ではドウルマンIIIからチャカラクIへ、という時期差があることが分かる。ただしチャカラク・テペの様相から判断すると、碗2類の年代には幅があり、時間幅を限定するのは難しい⁶⁾。

南バクトリアではほかにもディルベルジン・テペ、コフナ・マスジッド (Kohna Masjid) など、多くの遺跡でこの碗が確認されている。

次に北バクトリア出土資料をみる。層位的な出土状況を確認できるのは、ハシャット・テペ (Khasiat Tepa) 出土資料である(図2-12~16)。ハシャットIでは12、13のような1類が出土し、ハシャットIIでは14、15のような2類が出土している。IからIIへの間には建物の増築が行われるなど(Ahnaev 1988: 31)、両者にはある程度の時期差が想定されるので、北バクトリアでも南バクトリアと同様に1類から2類への变化を確認することができる。そのほか、ダルヴェルジン・テペ、カラ・テペ (Kara Tepe) など、多くの遺跡でこの碗が出土している。特にカラ・テペからは典型的な暗文を持つ2類が、副葬品として一括出土している(図10-11)。この一括資料についてはのちに絶対年代の項で詳しく触れる。

2. 両把手付き大型浅鉢(図3、図4)

中央アジアで出土する大型の浅鉢にはいくつかの系統があるが、ここで取り上げるのは口縁部に一对の把手を持つ浅鉢である。底部が平底か円形台で、ろくろで引き上げら

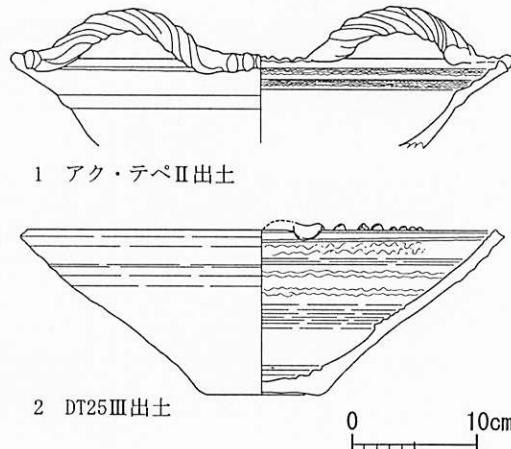


図4 北バクトリア出土の大型浅鉢

れた内湾した胴部から外側に伸びる口縁部を持つ。この浅鉢を形態によってふたつに分類する。

1類：別作りの口縁部が胴部に取り付けられ、両者の間に鋭い稜がある。口縁部の幅が広く、口縁内側には波状文やスタンプによる装飾が施され、上向きに一对の把手が付けられる。把手は2本の粘土紐をねじって製作されたものや、一本の粘土紐に刻みを入れて撚紐状にみせているものなどがある。把手の付け根に三角形の突起が存在する場合があり、この両把手付き大型浅鉢が金属器の模倣であることを示唆している。図3-1が1類の典型である。

2類：口縁部と胴部が別作りでなく、両者の間の稜は1類に比して鋭くない。また1類よりも口縁部の幅が狭く、

単純な把手や把手状の隆起を持つ。図3-4が2類の典型である。

南バクトリアでは、ドゥルマン・テペとチャカラク・テペでこの1類と2類が層位的に出土している。最初に図3でドゥルマン・テペの様相をみてみると、ドゥルマンIIIではじめて1、2のような1類が現れ、それとともにになってスタンプ装飾もはじめて使用されるようになる⁷⁾。ドゥルマンIVで出土した3には、口縁部と胴部の境に稜はあるが波状文などは施されず、スタンプ装飾が退化したと思われる指頭圧痕が口縁内面に連続して施されている。チャカラク・テペでは、特にチャカラクIIにおいてこうした浅鉢の様相を確認することができる。出土している資料は、図3-4、5のように口縁幅が短く、口縁上に把手状の隆起を持つ2類ばかりである。またスタンプ装飾は施されず、沈線や波状文もあまり施されない。桑山はここでみられる大型浅鉢の型式学的な差異を取り上げ、これが時期差であることを指摘した(Kuwayama 1974; 桑山 1990)。実際、碗の変遷で確認した通りドゥルマンIIIとチャカラクIの間には時期差があるので、大型浅鉢の1類と2類の違いも時期差であることが分かる。したがって、2類にみられる口縁上の隆起は1類の把手が退化したものということができる。

バルフでは形態を判断できるほどの出土品はないが、波状の口縁の破片で、その内面に波状文や凹線を施す資料がバルフIIIから出土している。粘土紐を二本ねじりあわせて作った把手や、粘土紐に螺旋状の刻み目を入れた把手がこのバルフIIIではじめて現れることも併せて考慮すれば、層位的にバルフIIIで1類が出現すると考えて問題なかろう。また、スタンプ装飾がはじめて現れるのがこのバルフIIIである。1類とスタンプ装飾が同時に出現するという現象はドゥルマンIIIとまったく共通しており、この両時期を土器からみた場合の同一の画期と考えることが可能である。

北バクトリアにおいてもこの大型浅鉢は多くの遺跡で出土している。まず、アク・テペII(Ak Tepe II)遺跡では1類に属する個体が出土している(図4-1)。コバディアーン地域ではIV期にみられなかったこの系統の大型浅鉢が、時間的に断絶のあるVで出土する(Дьяконов 1953: 289)。また、DT25 IIIでは2類の個体が出土している(図4-2)。DT25 IIからスタンプ装飾を施された土器が多く出土している点、IIIからは非常に退化したスタンプが施された土器やのちに触れる瓶1類が出土している点を考慮すれば、DT25のIIからIIIへの土器の変化は、ドゥルマン・テペからチャカラク・テペへの変化と完全に一致している。

3. 瓶(図5、図6)

瓶にはいくつか系統があるが、本稿で取り上げるのはい

わゆるササン銀器にみられる瓶を模倣したものである。この瓶を形態によってふたつに分類する。

1類：長円形の胴部から長めの頸部へゆるやかに移行する形態。片側に断面ハート形、または橢円形の把手があり、口縁部から胴部最大径のやや上までをつないでいる。口縁は円形であるが、把手がとりつく部分の反対側はつまみ出された注口となっている。胴部はろくろで引き上げ、頸部をしぼりによって成形している。成形後に別に貼り付けられる高台か、または削り出された高台、円形台を持つ。黄褐色や赤褐色のスリップがかけられ、その上からミガキによる暗文が施されている場合が多い。図5-1が1類の典型である。

2類：胴部下半のふくらみが非常に大きく、短い頸部へ直線的に移行する形態。把手は1類にくらべて小さく、底部は平底である。暗文は施されない。図5-5が2類の典型である。

南バクトリアでは、チャカラク・テペでこの1類と2類が層位的に出土している。まず瓶形土器が初現するのはチャカラクIIであり、他遺跡にくらべても出土量が非常に多い。そしてそれらはすべて1類に属する(図5-1, 2)。しかしチャカラクIIIでは出土量自体が減り、出土する個体は2類のものだけである(図5-3)。このことから、1類と2類の差異が時期差であることが分かる。このほか、南バクトリアではコフナ・マスジッドで多くの瓶が出土している。

北バクトリアの遺跡でもこの瓶は出土しており、1類から2類への変化についても指摘されている(Седов 1987: 56)。ここでは新しい出土資料からそれを確認しておく。図5-4はDT25 III出土である。ろくろ成形され削り出した高台を持つが暗文は施されていない。先にも触れた通り、DT25 IIIでは大型浅鉢の2類も出土しており、チャカラクIIと同じ様相を示す。図5-5はDTCI出土で、2類に属する。やはり暗文は施されていない。DTCIはチタデルの最上層であり、古くに放棄されたシャフリストンより確実に新しい時代に属する。したがって、1類と2類が時期の異なる遺構から出土していることが確認できるのである。このほか、コバディアーン地域のアク・テペII遺跡で多くの1類が出土している(図6-1)。この遺跡では先にみた図4-1のような大型浅鉢1類も出土しているが、報告者は同じ年代として扱っている(Седов 1987: 117)。この問題については最後にもう一度触れる。コバディアーン地域ではムンチャック・テペ(Munchak Tepe)でもII層⁸⁾から2類が出土している(図6-2)。また、バラリク・テペ上層からも2類が出土している(Альбаум 1960: 89, рис. 60-a1)。

4. 大甕(図7)

バクトリア地域では器高が1m前後の大型の甕が広く

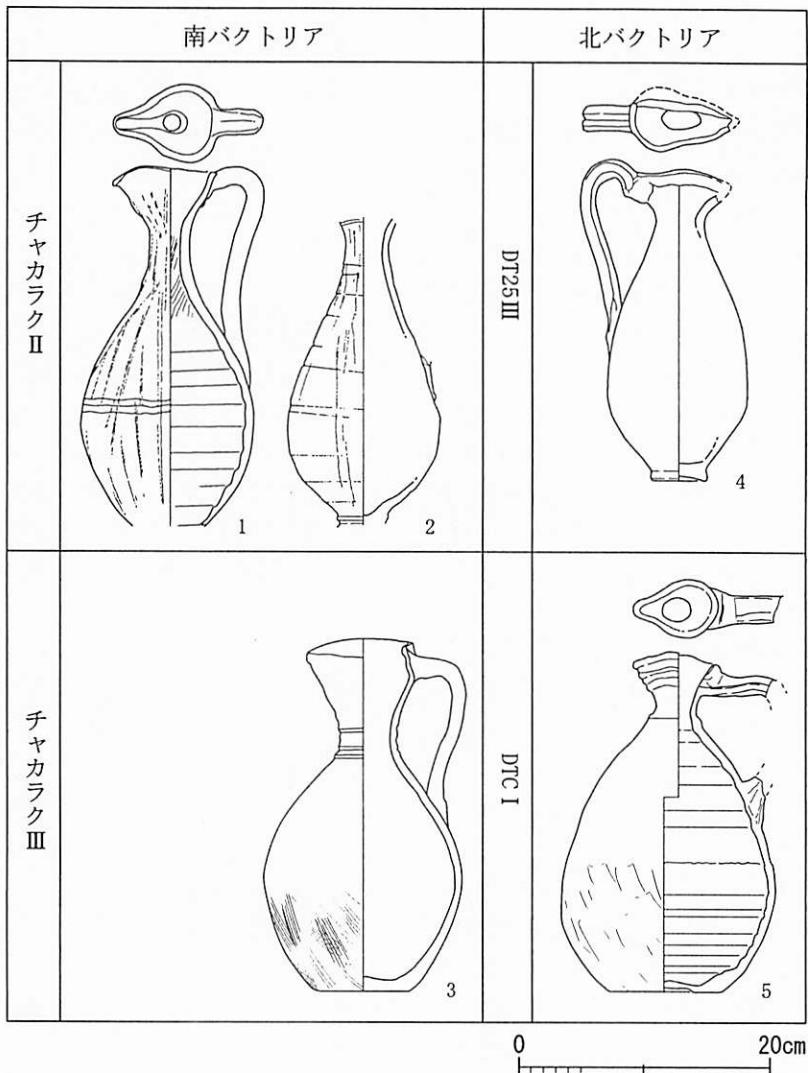


図5 瓶の変遷

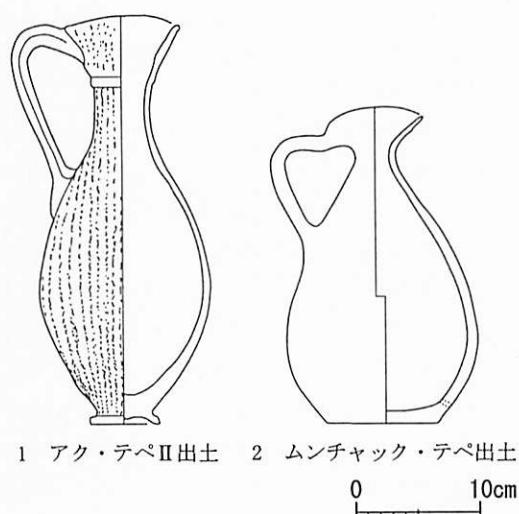


図6 北バクトリア出土の瓶

使用されており、多くの遺跡で大量に出土する。水や食物などの貯蔵に使われるほか、底部を打ち欠いて逆さに据え付けパン焼きカマドとして用いられていた。粘土紐・粘土板を積み上げて成形し、口縁も基本的には胴部に別の粘土紐をかぶせて作られる。この大甕を形態によってふたつに分類する。

1類：丸底で断面長円形の胴部を持ち、胴部最大径が器高の中ほどに存在していて口縁径と大きな違いがない。口縁は内湾または直立し、1～2条の稜を持つ場合が多い。図7-1が1類の典型である。

2類：平底で、強く張った肩部が胴部最大径となり、口縁径が小さくなるもの。口縁は大きく外反する。図7-6が2類の典型である。

南バクトリアでは、チャカラク・テペでこの1類と2類が層位的に出土している。チャカラク IIから1類に属する個体のみが出土し(図7-1, 2)、チャカラク IIIになると

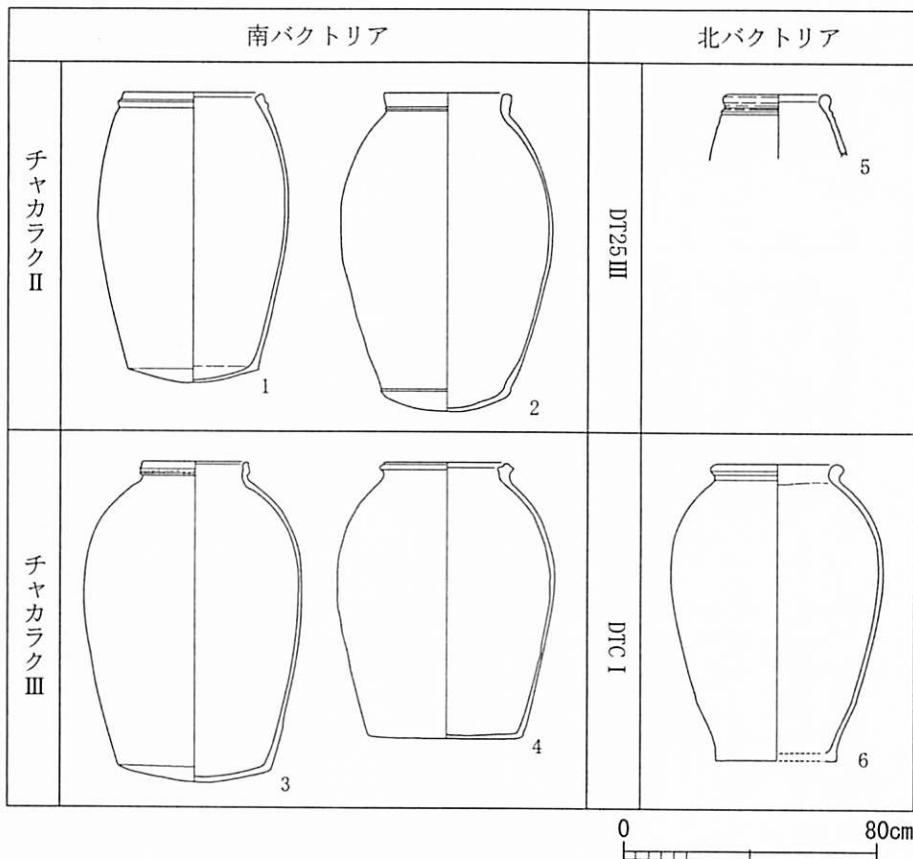


図7 大甕の変遷

丸底ながら肩が強く張る、1類と2類の要素を合わせ持つもの（図7-3）と2類（図7-4）となる。すなわち、大甕は1類から2類へ変化し、チャカラクIIIがその過渡期となるのである⁹⁾。

北バクトリアではダルヴェルジン・テペのチタデルでの1類と2類が層位的に出土している。これまでDTC IとIIから出土した底部の形態まで分かれる資料は、すべて肩の張った平底という2類に属するものである（図7-6）。一方シャフリスタンとDTC IIIでは2類と考えられる口縁が圧倒的に多く（図7-5）、1類に特徴的な外反した口縁はほとんどみられない。つまり、DTC IIIからDTC II、Iにかけて、大甕は1類から2類へ変化したことになる。

5. アンフォラ（図8）

口縁部または頸部から胴部にかけて断面橢円形の一対の把手を持つ壺形土器で、丸く張った腹部から曲線的に頸部に移行するものと、腹部との境から直線的に立ち上がる頸部を持つものがある。底部は平底か削り出された円形台で、器表には多くの場合スリップがかけられる。このアンフォラという器形自体はアイ・ハヌムなど、グレコ・バクトリア期とされる遺跡からすでに出土している。胴部、口縁部の形態には様々な変化があり、地域による違い、同一層の中の様々なバリエーションなどを考慮すると、形態の違い

によって編年の基準とすることは難しいことが分かる。したがってここでは、クンドゥズ地方を例にとって、アンフォラの器表に施される装飾のみに注目して検討を行う。

ドゥルマン・テペでは、ドゥルマンIから継続してアンフォラが出土するが、ドゥルマンIIIで大型浅鉢と同じスタンプ装飾が施されるようになる。多くは胴部と頸部の境に数条の沈線があり、スタンプ装飾はその下部に連続的に押捺される（図8-1, 2）。また暗文を持つものもみられる（図8-3）。

チャカラク・テペでは、チャカラクI～IIIのすべての層位において多量のアンフォラが出土しており、胴部形態、口縁形態はドゥルマンIIIの資料と共通している。しかし、スタンプ装飾を施されたものは皆無で、多くの個体は暗文を施されている。特にチャカラクIIで暗文が多用されていることが分かる（図8-4, 5）。このチャカラクIIは、先にも挙げた碗2類や瓶1類など他の器形でも暗文が盛行する時期である。のちに触れるカラ・テペ一括資料（図10）においてもほとんどの個体が暗文装飾を施していることから、この時期に暗文装飾がバクトリア地域で広く流行していたことが分かる。しかしチャカラクIIIになるとその装飾もまれになる（図8-7～10）。このように暗文がみられなくなるのは、碗と瓶でも共通している。

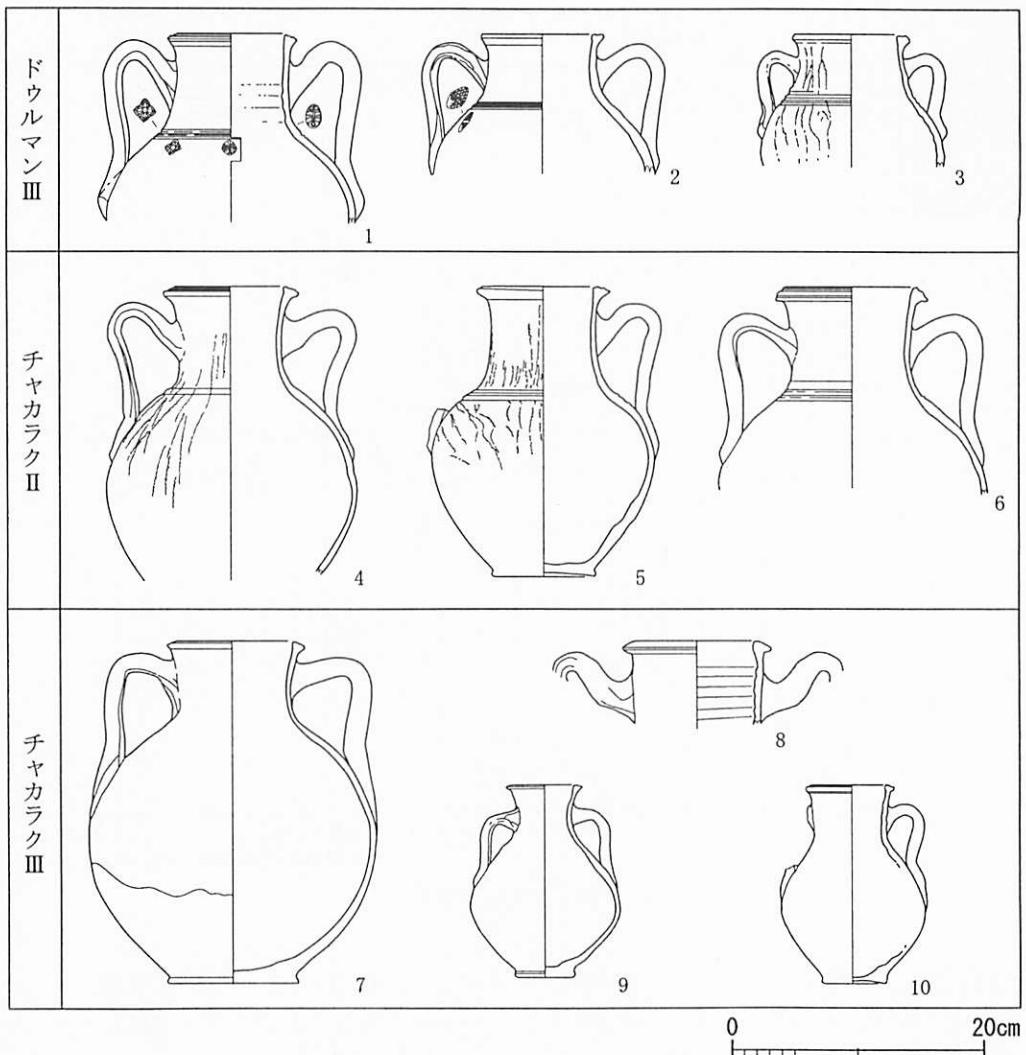


図8 クンドゥズ地方におけるアンフォラの変遷

土器編年

これまで確認した各器形における型式学的な検討と層位的な出土状況とを併せて、バクトリア地域では以下のような土器編年を組むことができる（図9）。

1. PK I期

大型浅鉢1類の出現を画期とし、南バクトリアにおいてはスタンプ装飾が施された個体が出現するのもこの時期にあたる。このスタンプ装飾は頻繁に用いられるが、暗文はいまだごく一部の個体にしか施されない。また碗の低平化がはじまっているものの、土器の内面に暗文が施されることはない。南バクトリアではスタンプ装飾はこの時期に限られる。バルフIII、ドゥルマンIIIを基準とし、ジガIII、ドゥルマンIV¹⁰、DT25II、ハシャットI、コバディアーンVが含まれる。

2. PK II期

碗2類と、瓶1類の出現を画期とする。暗文がアンフォラや瓶を中心に広く使用され、スタンプは退化しながらも

残る。チャカラクIIの資料を基準とし、ジガI、II、チャカラクI、DT25III、ハシャットII、バラリク下層¹¹、カラ・テペー括資料が含まれる。コフナ・マスジッド最上層やハイラバード・テペ（Khairabad Tepe）¹²はこの時期から次のPK IIIに及んでいる。のちに述べるように長い時間幅を持っている可能性が高く、さらに何段階かに区分することが可能であると考えられる。

3. PK III期

大甕および瓶が1類から2類へ変化し、暗文をともなうアンフォラ、碗2類は継続して存在している。全体として暗文の使用は大幅に減少している。チャカラクIIとIIIの画期をPK II期とIII期の画期と定義するが、チャカラクIIIは次のPK IV期にも十分及んでいる。ほかにはハシャットIII、バラリク上層がこの時期に含まれると考えられる¹³。

4. PK IV期

大量に出土する大甕はすべて2類に変化している。瓶2

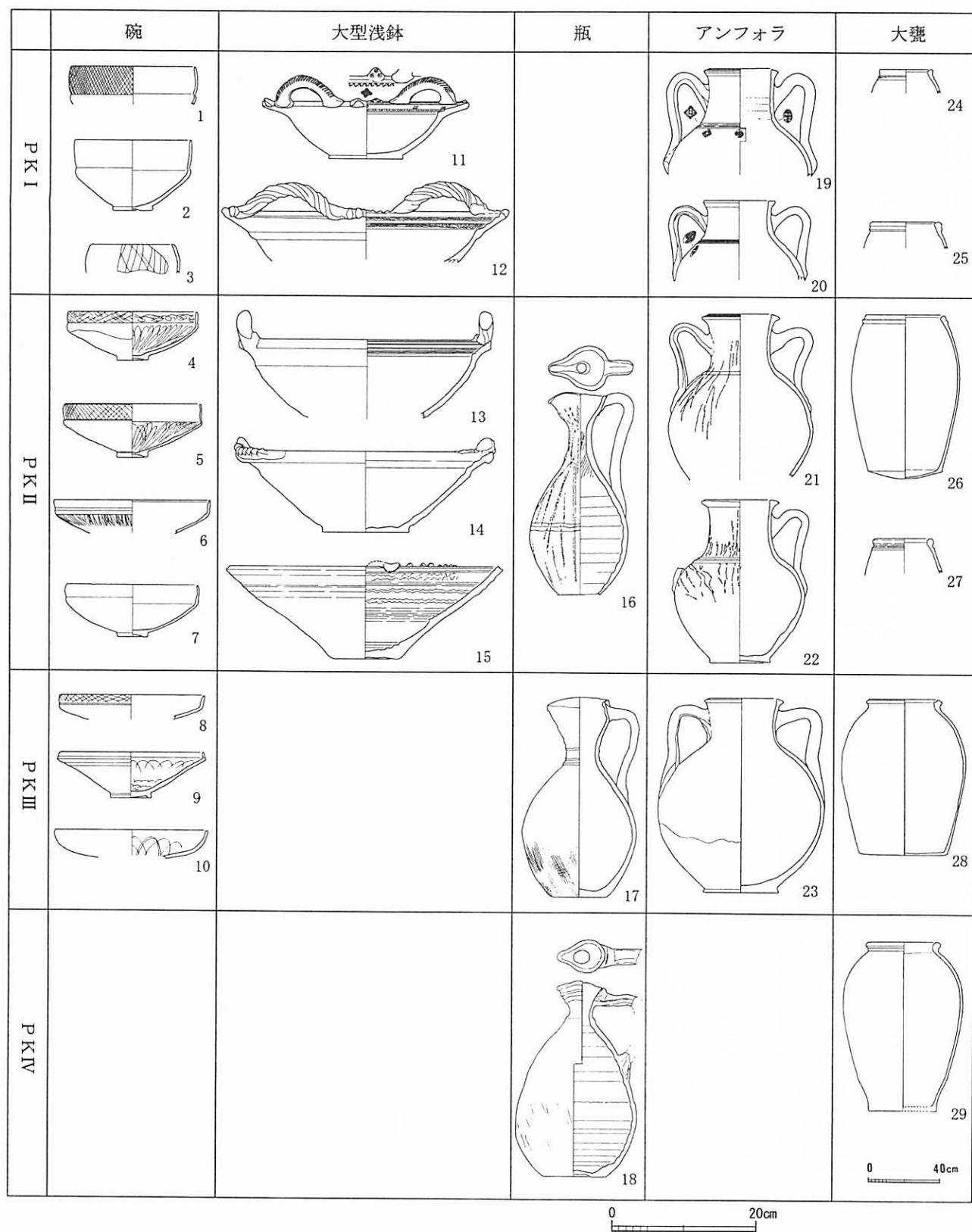


図9 土器編年図 (S = 1 / 8、大甕のみS = 1 / 32)

類は存在しているが碗2類は消滅しており、暗文をともなう個体もみられない。DTC I、II、ハシャットIVがこの時期に含まれる。

絶対年代

前節において構築した土器編年の各段階に絶対年代を与えることを試みる。研究史でも触れたようにこの地域において絶対年代の基準となるのは遺跡から出土する貨幣である。ここでは、一括出土した資料を中心に扱い、包含層資料についてはその層の下限を考える際の参考資料として扱う。

はじめにみるのは、バクトリア地域における最大の仏教センターと考えられているカラ・テペから出土した一括資料である(図10)。これらの土器はコンプレクスAの聖堂の中の一室で発見されたもので、折り重なるようにして出土した20体ほどの人骨と共に伴っていた。さらにここから26枚の貨幣が発見されたのである。報告者は、人骨に損傷がないこと、専用の墓を作らずに聖堂の一室にまとめて葬られていることなどを取り上げて、これらの人骨が伝染病による大量の死者の一括埋葬であると報告している(Сычева 1975: 121)。したがってこの土器群と貨幣はそれにともなう副葬品であると考えられている。土器の内容をみてみると、完形のものではアンフォラが5個体、片把手の壺が7個体、碗2類が4個体、皿が1個体となる。いずれも赤色スリップをかけられ、ほとんどの個体はその上から暗文を施されている¹⁴⁾。ただし図10-1は器面全体に退化した花形のスタンプ装飾が施され、図10-2は暗文とともに肩部にスタンプ装飾が粗雑に押されているという(Сычева 1975: 93)。こうした特徴から、この一括資料はすでに述べたようにPKII期に属する。ただし、1個体内に暗文と退化したスタンプ装飾が両方施されるという点で、これを暗文の盛行とスタンプ装飾の退化という過程の過渡的な段階ととらえ、PKII期の中でも早い段階に位置づけることが可能である。貨幣の内容を確認すると、26枚の貨幣のうち判別可能なものは10枚で、それらはすべてクシャノ・ササン貨幣のバフラムI世クシャンシャー銅貨であった。

カラ・テペではコンプレクスDの西洞窟からも一基の墓が検出されている。そこでは5枚の貨幣とともに2個体のアンフォラ、1個体の碗2類、1個体の皿が出土しており、少なくともアンフォラには暗文が施されている(Ставиский и Мазурина 1996: 82, рис. 32)。つまり片把手の壺形土器が出土していない以外はコンプレクスAの資料と共通している。出土貨幣はいずれもクシャノ・ササン銅貨で、1枚がバフラムI世、2枚がバフラムII世、残りの2枚がホルミズドI世に比定されている。

バフラムI世クシャンシャー貨幣は、これまでの研究で

は4世紀半ばとされ、その後のキダーラ・クシャンの年代を考えても大きく動くことはない¹⁵⁾。バフラムII世クシャンシャー貨はさらに遅れて4世紀後半であるから、この土器群を4世紀末に位置づけることが可能であり、したがってPKII期はこの年代を含むことになる。

では、同じPKII期に含まれるチャカラクIIにおいても同じ絶対年代を与えることが可能であろうか。チャカラクIIで出土した貨幣のうち年代が明らかなものはササン朝バフラムIV世(388~399)銀貨(あるいはその模倣貨)であり、少なくともこの年代までにチャカラクIIが終末を迎えてはいないという意味でカラ・テペ一括資料と矛盾しない。

次にみるのは、ドゥルマン・テペにおいて発見されたクシャノ・ササン貨幣の一括埋納である(水野編 1968)。ドゥルマンIVからの出土で、小型の壺の中に大量の銅貨がまとめて入れられていたのである。こうした壺が2個体出土しており、そのうちの1個体には金貨も1枚入れられていた。この金貨は、裏面が打刻されていない特殊なものである。報告者は、王冠のタイプ(球体装飾と一対のディアデム)からキダーラ王の発行かそれと同時代のものと考え、380年頃の年代を与えている(水野編 1968: 49~55)。銅貨自体はさび付いてひとつの塊となっているので、そのすべてをどの王のものか同定することはできないが、判別可能な数枚はすべて金貨の王像と一致する。したがって、基本的にはこの金貨の年代をもって銅貨の年代とすることが可能であり、壺の埋納時期もこれに近い年代と考えることができる。これがドゥルマンIVの廃絶年代でもあるとすれば、この資料によってPKI期とPKII期の画期を4世紀末におくことができるるのである。

以上のように一括資料で確認することができる年代は、PKI期とPKII期の画期のみで、それ以外の年代というものは明確に決めがたいことが分かる。これまでの年代決定方法をみてみると、ササン朝によるクシャン朝への攻撃がきっかけで土器の変化が起こるとして、本稿で言うところのPKI期の開始年代は3世紀半ばにおかれていた(Gardin 1957: 95; 水野編 1968: 56)。しかしPKI期への転換は、スタンプ装飾にみられるように、北バクトリアから南バクトリアへの影響と考えることも可能であり(岩井2002、及び本稿の註7も参照)、碗1類や大甕1類はより古い時代から継続して用いられていた。さらに新たに登場する大型浅鉢1類も、その祖形となる金属器や土器がこれまでのところササン朝の領域からは発見されていない。とすれば、現段階ではPKI期の開始をササン朝の侵入と関連づける根拠はなく、その年代を明言することはできない。ただし、ドゥルマンIIIやジガII、IIIからはヴァースデーヴァI世以降の貨幣が出土しており、ジガ・テペではそのほとんど

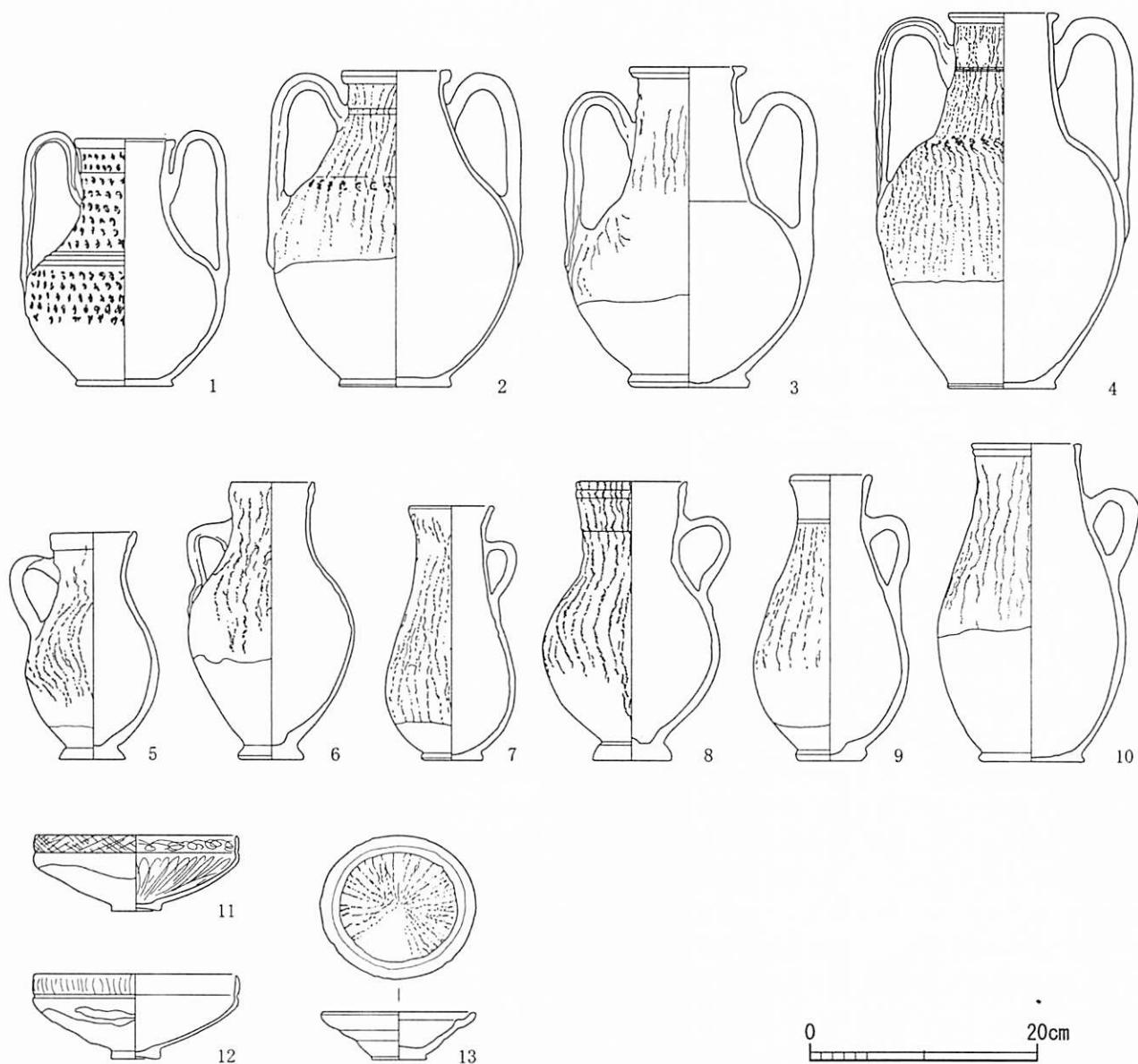


図10 カラ・テペ出土の一括資料

が4世紀以降の貨幣であるという(Пидаев 1984: 123)。こうしたことから、PK I期の上限は早くとも3世紀の後半で、4世紀まで下がる可能性もある。

次にPK II期とIII期の画期(すなわちチャカラクIIとIIIの画期)の年代を考える。チャカラクIIIから出土している貨幣で年代の分かるもののうち、最も古い貨幣はホスローII世(591-628)銀貨(あるいはその模倣貨)である。ほかに円形方孔錢(中国錢あるいはソグド貨の模倣貨)やアラブ・ササン貨など、8世紀にまで下るもののが含まれていることから、チャカラクIIIの年代は7~8世紀である蓋然性が高い。その場合IIとIIIの画期は6世紀末から7世紀はじめとなり、PK II期は4世紀末から6世紀という非常に長い時間幅を持つことになる。

PK III期とIV期の画期については、両時期にまたがって継続する遺跡もあるため明確にはできないが、逆にそこから、PKIII期が過渡的な段階でそれほど長い時間幅を持っていない可能性を指摘できる。さらにチャカラクIIIやDTCI(すなわち両遺跡の最上層)からイスラムの施釉陶器が出土せず、PK IV期の下限が8世紀後半に及ぶことはないので、III期とIV期の画期は7世紀半ばから後半となる蓋然性が高い。

これらの絶対年代をまとめると以下のようになる。不明確なものはカッコをつけた。

PK I期 (3世紀後半) ~ 4世紀末

PK II期 4世紀末~(6世紀後半)

PK III期 (7世紀初頭) ~ (7世紀後半)

PK IV期（7世紀後半）～8世紀前半

遺跡の年代

この土器編年によって各遺跡の年代を検討すると、これまでの見解とは異なる様相が明らかになる。はじめに、バラリク・テペの例をみてみよう。すでに触れたように、この遺跡の年代については、上層から出土した壁画の年代とともに多くの議論がある。発掘者のЛ.И.アリバウム(Альбаум)は、壁画が出土した上層遺構の年代を5世紀末から6世紀としているが(Альбаум 1960: 125)、Т.Д.アナエフ(Аннаев)は土器の検討から7世紀後半～8世紀前半とし(Аннаев 1988: 70)、А.М.ベレニツキー(Беленицкий)とБ.И.マルシャク(Маршак)は壁画自体の検討から6世紀末から7世紀としている(Беленицкий и Маршак 1979: 35)。ソロヴィエフは7世紀後半に北バクトリアで増大する「浮き彫りのある土器」がバラリク上層に少ないとあって、さらに6世紀末から7世紀前半までという限定した年代を与えていた(Соловьев 1996: 15)。本稿では、これをPK III期とした。したがって、ほぼ7世紀初頭から7世紀後半までと考えたのである。これは、バラリク上層から瓶2類が出土するとともに、暗文の施される個体が存在する(Альбаум 1960: 93-95)ことによる。アナエフは丸底の碗や瓶などの類似からバラリク上層出土土器をハシャットIVに共通するものととらえたが(Аннаев 1988: 41)、暗文の存在から考えればむしろハシャットIIIに共通する要素が多いのである。また、ソロヴィエフがいうように「浮き彫りのある土器」の検討によって時期を限定できる可能性もあるが、資料が少ない現段階では7世紀後半までの年代を考えておきたい。この年代観はベレニツキーとマルシャクのものとほぼ同じであり、土器の年代観と壁画の年代観が一致したといえるだろう¹⁶⁾。

コバディーン地域のアク・テペIIでは、三つの文化層が確認され、すでにみたように大型浅鉢1類と瓶1類が出土している。したがって、この遺跡はPK I期からII期に属するが、報告者はこれらの土器を同じ段階のものと考えて一括しており(Седов 1987: 117)、調査で確認された層位が遺物に反映されていない。今後は、このアク・テペIIが報告よりも長い期間活動していた可能性を考慮する必要がある。

次にバルフ地方のディルベルジン・テペをみる。この遺跡はソヴィエト隊によって発掘され、その報告において「都市の終末はエフタルの襲来による」とされた(Кругликова 1974: 99)。その後の発掘はすべてこの年代観を当てはめる形で行われ、都市全体がエフタルの襲来によって滅んだと考えられていた。調査区VIIIにおいても、床面よりも上層で検出されたひとつの墓がほとんど何の根拠もなくエフタル

の侵入によるものと定義されてしまっている(Кругликова и Пугаченкова 1977: 103)。しかしこの調査区VIIIからはおそらくはPK III期にまで下がる資料が出土しているし(Кругликова и Пугаченкова 1977: 98, 100-1)、他の調査区からも確実にPKII期に属する資料が出土している。フィッチモンズは、これらの土器とともにディオスクロイ神殿と呼ばれる建物から発見されたシヴァ・パールヴァティーの壁画についても7～8世紀まで下げる見解を発表している(Fitzsimmons 1996)。

またダルヴェルジン・テペのDT25においても、仏教寺院の下限をエフタルの侵入とする説がある(創価大学・ハムザ研究所 1996)。しかし、この遺構が仏教寺院として機能していたDT25 IIは本稿の検討からPKI期に属し、寺院廃絶後の建築であるDT25 IIIはPKII期に属する。つまりDT25の仏教寺院の廃絶は4世紀末と考えられ、PK II期には別の建物が建てられて活動が継続していたのである。したがって、ダルヴェルジン・テペにおける仏教の廃絶は4世紀末頃に求めることができ、カラ・テペが廃絶する時期とも一致してくる。この事実は当地域の仏教史を考察するうえでも非常に重要である。

以上のように、土器編年を利用した遺跡の年代の再検討によって、いくつかの遺跡で重要な年代の変更があり得ることが分かった。遺跡の廃絶や小規模化、さらに土器変化の画期についても、ササンの支配やエフタル、突厥といった遊牧民の侵入とは時期的にほとんど関係していない。こうしたことを考え合わせると、これまで「遊牧民の侵入による破壊」に帰せられていた遺跡廃絶などに対して、異なる原因を求めなければならない。また、バクトリア地域を支配する遊牧民が交替しても、土器製作という側面ではその技術が連綿と受け継がれているということは、その支配体制がオアシス定住民の生活形態そのものを変えるようなものではなかったことを示しており、今後は「遊牧民による破壊」というモデルを前提としたバクトリア史全体も再考する必要が生じてくるのである。

おわりに

本稿では、文献の少ないバクトリアの歴史を考古学的に追究していくための基礎作業として、土器編年の構築を行った。その結果が図9に示したバクトリア地域の土器編年である。今まで個別的にしか扱われてこなかったバクトリア地域の土器を、これによってひとつの枠組みに収めることが可能となった。そして、この編年によって遺跡の年代を考慮することで、政治的な変動とは関係しない土器製作のあり方が明らかになったのである。今後は、この編年を叩き台として時期の細分を行うとともに、具体的な遺跡の活動期間や遺跡間の関係について検討していくことが課題である。

題となる。また、これから再開されるであろうアフガニスタンの考古学的調査においても、この編年が活用されることを期待したい。

本稿は2001年1月に京都大学大学院に提出した修士論文の内容に加筆・修正を施したものである。論文作成中より京都大学人文科学研究所教授（当時）の桑山正進先生から様々なご指導をいただいた。また上原真人先生をはじめとする京都大学考古学研究室の諸兄、田辺勝美先生をはじめとするダルヴェルジン・テペ発掘調査団の諸兄から多くのご指導をいただいた。特に土器型式の議論については岩田貴之氏から多くの示唆を受けた。ここに記して感謝したい。

最後に、本稿を畏友遠山昭登君に捧げる。

註

- 1) 本稿では便宜的にアム・ダリヤの北を北バクトリア、南を南バクトリアと呼ぶ。
- 2) 例えば、バラリク・テペ (Balalyk Tepe) の例が挙げられる。5世紀末から8世紀前半までの間でその年代は揺れているが、これについては本稿の最後でもう一度触れる。
- 3) 初期中世とは、ロシア語の *Раннесредневековые* の直訳であるが、使用する研究者によってその絶対年代は異なる。ソロヴィエフは5世紀から8世紀を初期中世にあてる。
- 4) 表1に掲載した遺跡が、層位的な出土状況の検討に耐える報告がなされている遺跡である。DTCについては、4区と6区の二カ所でそれぞれI層とII層が確認されているが、DTC4区のII層とDTC6区のII層の間では床面のレベルに0.5~1mの差がある(田辺・堀他 2000; 田辺・山内他 2001)。したがって、DTC6区のII層はDTC4区のIII層(未発掘)に相当する時期と考えて問題ないので、ここではまとめてDTC III~Iとした。また、DT25については、本稿のI~IIIが報告書の第1建築期~第3建築期に相当する。
- 5) ただし、報告ではジガ III~I をすべて「クシャノ・ササン期」としてひとつの時期にまとめてしまっている。
- 6) フィッチモンズは口縁部高と口縁半径の比率によってチャカラク I から III への変化も示しているが、全層位を通して碗の口縁部高は概して低く、その変化は微妙である。
- 7) ここでいうスタンプ装飾とは、木の葉型や渦巻き、足型などのスタンプを器表に押すもので、すでにアイ・ハヌム (Ai Khanoum) 出土土器にみられる。北バクトリアではクシャン期にも継続して用いられるが (Цепова 2001)、南バクトリアではこのドゥルマン III やバルフ III で初現する。したがって、南バクトリアのスタンプについては、北バクトリアからの影響と考えることが可能である (岩井 2002)。しかし、細かな系統については多くの検討を要するため、別稿で論じたい。
- 8) コバディアーン全体の編年ではコバディアーン VI にあたる。
- 9) ドゥルマン・テペでは、II~IV期を通じて1類のみが出土する。PK III期及びIV期の資料については図9~24、25に掲載している。
- 10) 浅鉢1類の把手と思われる粘土紐をねじって作った把手が出土していること、暗文を施された土器が少ないと、碗2類も瓶1類も出土していないことなどから、PKII期には下らないものと考えられる。
- 11) バラリク下層をPK II期とした理由についてはPK III期の年代とともに本論の最後で触ることにする。註16を参照。
- 12) 註16で触れる香炉の存在からこの時期に入れた。
- 13) 北バクトリアにおいては、このPK III期から次のIV期に属する層からコップ型土器が出土する。いくつかの系統に分けることが可能であり、北バクトリアでは重要な時期的指標となるが、紙幅の都合上、別稿で論じたい。
- 14) 図10に掲載した13個体以外は、不鮮明な写真のみの報告である。
- 15) クシャノ・ササン貨幣の編年については諸説あり、確実に編年が定まっているとはいがたいが、バフラム I世クシャンシャーが4世紀半ば~後半という点では問題なかろう (Cribb 1990; 田辺 1994)。
- 16) 上層がPK III期であることから、バラリク下層はより古い時代に属すると考えられる。下層から出土している香炉については本稿では触れなかったが、バラリク下層出土品のように脚部に大きな透かし穴を持っているタイプはダルヴェルジン・テペのシャフリスタンなどで出土しており、PK III期にまでは下らないと考えられている (田辺・堀他 2000: 135)。したがって、バラリク下層はPK II期に属するであろう。なお、この香炉が編年の指標になりうる点も指摘されており (田辺・堀他 2000: 135)、これによってPK II期を細分できる可能性もある。

参考文献

- Альбаум, Л. И. 1960 *Балалык-Тепе*. Ташкент, Издательство Академии Наук УзССР.
- Аннаев, Т. Д. 1988 *Раннесредневековые Поселения Северного Тахаристана*. Ташкент, Издательство "Фан" Узбекской ССР.
- Беленицкий, А. М. и Б. И. Маршак 1979 Вопросы Хронологии Живописи Раннесредневекового Согда. *Успехи Среднеазиатской Археологии* выпуск 4: 32–37.
- Bivar, A. D. H. 1956 The Kushano-Sassanian Coin Series. *Journal of the Numismatic Society of India* XVIII: 13–42.
- Cribb, J. 1990 Numismatic Evidence for Kushano-Sasanian Chronology. *Studia Iranica* 19: 151–193.
- Дьяконов, М. М. 1953 Археологические Работы в Нижнем Течении Реки Кафирнигана (Кобадиан) (1950–1951 гг.). *Материалы и Исследования по Археологии СССР*. 37: 253–293.
- Fitzsimmons, T. 1994 Ceramics and the Chronology of Dilberdzin Tepe and Zhiga Tepe (North Afghanistan). *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities-Kyoto University* No. 29: 33–60.
- Fitzsimmons, T. 1996 Chronological Problems at the Temple of the Dioscuri, Dil'berdzin Tepe (North Afghanistan). *East and West* 46/3, 4: 271–298.
- Gardin, J.-C. 1957 Céramiques de Bactres. *Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan*. 15. Paris, Klincksieck.
- Kolb, Ch. C. 1983 A Red Slipped 'Pseudo-Arretine' Ceramic from South Central Asia. *East and West* 33/1–4: 57–103.
- Кругликова, И. Т. 1974 *Дильбержин*. Часть 1. Москва, Издательство Наука.
- Кругликова, И. Т. 1986 *Дильбержин храм дноскуров*. Москва, Издательство Наука.
- Кругликова, И. Т. и Г. А. Пугаченкова 1977 *Дильбержин*. Часть 2. Москва, Издательство Наука.
- Kuwayama, S. 1974 Kapisi BegramIII: Renewing its Dating. *Orient: Report of the Society for Near Eastern Studies in Japan* 10: 57–78.
- Литвинский, Б. А. и А. В. Седов 1983 *Тепаг-Шах*. Москва, Издательство Наука.

- Литвинский, Б. А. и В. С. Соловьев 1985 *Средневековая Культура Токаристана*. Москва, Издательство Наука.
- Lyonnet, B. 1997 *Céramique et Peuplement du Chalcolithique à la Conquête Arabe. Prospections Archéologiques en Bactriane Orientale* Volume 2. Paris, Édition Recherche sur les Civilisations.
- Мандельштам, А. М. и С. Б. Певзнер 1958 Работы Кафирниганского Отряда в 1952–1953 гг. *Материалы и Исследования по Археологии СССР*. 66 : 290–324.
- Пидаев, Ш. Р. 1975 О Генезисе Штампованных Орнаментов на Керамика Античной Бактрии. *Общественные Науки в Узбекистане* 1975–8 : 67–71.
- Пидаев, Ш. Р. 1976 Некоторые Данные о Раскопках Кушанского Поселения Ак–Курган в Северной Бактории. *Советская Археология* 1976–1 : 187–196.
- Пидаев, Ш. Р. 1984 Керамика Джига–Тепе (из раскопок 1976 г.). *Древняя Бактрия* выпуск 3 : 112–124.
- Пугаченкова, Г. А. 1979 Жига–Тепе (раскопки 1974 г.). *Древняя Бактрия* выпуск 3 : 63–94.
- Пугаченкова, Г. А. 1984 Раскопки Южных Городских Ворот Дильбержина. *Древняя Бактрия* выпуск 3 : 93–111.
- Пугаченкова, Г. А., З. В. Ртвеладзе и др. 1978 *Дальверзинтепе*. Ташкент, Издательство “Фан” Узбекской ССР.
- Schachner, A. 1995/96 A Special Kind of Pattern Burnished Decoration on Late Kushan Pottery in Bactria and Afghanistan. *Silk Road Art and Archaeology* 4 : 151–159.
- Schlumberger, D., M. Le Berre, G. Fussmann 1983 Surkh Kotal en Bactriane I. *Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan*. tome25. Paris, Diffusion de Boccard.
- Седов, А. В. 1987 *Кобалиан на Пороге Раннего Средневековья*. Москва, Главная Редакция Восточной Литературы.
- Соловьев, В. С. 1996 *Раннесредневековая Керамика Северного Токаристана*. Елец, Елецкий Государственный Педагогический Институт.
- Ставиский, Б. Я. и В. Н. Мазурина 1996 Работы в Комплексах В, Г, Д. В Б. Я. Ставиский (ред.), *Будайские Комплексы Кара–Тепе в Старом Термезе*, 37–86. Москва, Издательская Фирма “Восточная Литература” РАН.
- Сычева, Н. С. 1975 Керамика Кара–Тепе. В Б. Я. Ставиский (ред.), *Новые находки на Кара–Тепе в Старом Термезе*, 88–148. Москва, Главная Редакция Восточной Литературы.
- Цепова, О. 2001 Керамика со Штампованным Орнаментом из Кампиртепе. *Материалы Токаристанской Экспедиции* выпуск 2 : 101–112.
- Veuve, S. 1974 *La Ceramique de Kohna Masjid*. Travail d'Etudes et de Recherches Présenté en vue de la Maîtrise spécialisée d'Histoire de l'Art et Archéologie, Université de Bordeaux.
- 岩井俊平 2002 「アム川南北の交流」『第9回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』9–15頁 ヘレニズム～イスラーム考古学研究会。
- 榎一雄 1958 「キダーラ王朝の年代について」『東洋学報』41卷3号 1–52頁。
- 片山章雄 1999 「中央アジア遊牧民の社会と文化」間野英二編『アジアの歴史と文化』8 中央アジア史 32–41頁 同朋舎。
- 加藤九祚 1997 『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』シルクロード学研究4 シルクロード学研究センター。
- 桑山正進 1985 「バーミヤーン大佛成立にかかるふたつの道」『東方学報』57冊 109–209頁。
- 桑山正進 1987 『大唐西域記』大乗仏典 中国・日本編9 中央公論社。
- 桑山正進 1990 『カーピシー＝ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所。
- 桑山正進 1999 「中央アジア考古学の発達」間野英二編『アジアの歴史と文化』8 中央アジア史 18–31頁 同朋舎。
- 桑山正進編 1992 『慧超往五天竺国伝研究』京都大学人文科学研究所。
- 杉山正明 1997 『遊牧民から見た世界史』日本経済新聞社。
- 創価大学・ハムザ記念芸術学研究所編 1996 『ダルヴェルジンテペ DT25 (1989–93発掘調査報告)』創価大学。
- 田辺勝美 1994 「ローマと中国の史書に秘められた「クシャノ・サン朝」」『東洋文化研究所紀要』124冊 33–101頁。
- 田辺勝美・堀咲他 1997 「ダルヴェルジン・テペ城砦址の発掘(1996年度)」『古代オリエント博物館研究紀要』XVII 101–117頁。
- 田辺勝美・堀咲他 1998 「ダルヴェルジン・テペの発掘(1997年度概報)」『古代オリエント博物館研究紀要』XVIII 157–212頁。
- 田辺勝美・堀咲他 1999 「ダルヴェルジン・テペの発掘(1998年度調査の概報)」『古代オリエント博物館研究紀要』XIX 73–140頁。
- 田辺勝美・堀咲他 2000 「ダルヴェルジン・テペの発掘(1999年度調査の概報)」『古代オリエント博物館研究紀要』XX 101–162頁。
- 田辺勝美・山内和也他 2001 「ダルヴェルジン・テペの発掘(2000年度調査の概報)」『古代オリエント博物館研究紀要』XXI 89–151頁。
- 樋口隆康・桑山正進 1970 『チャカラク・テペ』京都大学。
- 間野英二 1999 「中央アジアのイスラーム化」間野英二編『アジアの歴史と文化』8 中央アジア史 82–93頁 同朋舎。
- 水野清一編 1962 『ハイバクとカシュミルスマスト』京都大学。
- 水野清一編 1968 『ドゥルマン・テペとラルマ』京都大学。
- 山田明爾 1963 「キダーラ・クシャンについて」『印度學佛教學研究』11卷2号 235–240頁。

岩井俊平
京都大学大学院生
Shumpei IWAI
Kyoto University